

活動報告書

報告者氏名：神田雄樹 所属：秋田きらり支援学校 記録日：2014年2月28日

【対象児の情報】

○学年

小学部3年生の男児



○障害名

脳性まひ

○障害と困難の内容

- ・ 座位、首の保持は安定していない。姿勢保持のため、座位保持椅子を使っている。
- ・ 内言語は豊富にあり、「はい」「あむ（食事、お茶）」「ほん」などの発語ができる。教師を模倣し発声しようとする場面が増えてきている。
- ・ 顔見知りの教師には笑顔であいさつに応える。呼名に対して返事をする。
- ・ 活動に興味をもち、最後まで取り組むようになってきたが、慣れない場面や意に沿わない状況では、泣いて意思表示することがある。
- ・ 大きな集団での見通しのもてない活動では、緊張が強くなり不安な表情をする。
- ・ 要求や意思を表情や発声で表す。簡単な問い掛けが意思に沿っているときは「はい」と答える。

【活動目的】

○当初のねらい

「Drop Talk」や「絵カード・コミュニケーション」などのコミュニケーションツールを使用したいと考えた。これらのアプリケーションには、あらかじめたくさんのシンボルが入っている上に、写真や音声等のシンボルを簡単に追加できるため、気持ちを伝える場面や朝の会の進行、自己紹介などで使用していきたいと考えた。また、本児は年間を通して複数回、居住地校交流をしていることから、同年代の地域の友達とコミュニケーションを広げるためのツールとして活用していきたい。

○実施期間

平成25年5月から年間を通して使用。

○実施者

堀田聡弥、長谷川絵美子

○実施者と対象児の関係

学級担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

一日の活動の中で本児の伝えたい気持ちは、休み時間・食事・帰りの会・排せつなどの特定の場面に表出されることが多く、気持ちが伝わらないと「う～」と声を出したり、泣いて不快を示したりすることがある。

○活動の具体的内容

- ① 休み時間にやりたいことや行きたい場所を選択して身近な人に伝え、余暇活動を広げるためのコミュニケーションツールとして VOCA アプリケーション「絵カード・コミュニケーション」を活用した。(図1)
- ② 居住地校交流や生活単元学習や朝の会等で自分の思いを伝えるためのコミュニケーションツールとして VOCA アプリケーション「Drop Talk HD」を使用した。(図2)

図1：休み時間



図2：居住地校交流



○対象児の事後の変化

①「絵カード・コミュニケーション」の使用を通じて

- ・ 昼休みにやりたいことや行きたい場所を選択して伝えるように教師がアプリケーションを起動して、書見台に iPad を設置して手指で選択した。毎日繰り返し使用したことで、手指での選択が上達し、2 択から 3 択へ選択できる幅が広がった。
- ・ 自分の意思が伝わることや、コミュニケーションを図ることができることが分かり、自分から iPad のある方に手を伸ばし、やりたいことや行きたい場所を伝えようとする場面が見られた。



②「Drop Talk HD」の使用を通じて

- ・ 居住地校交流で自己紹介の際に「Drop Talk HD」を使用したり、リコーダー演奏の際に楽器アプリケーション「Ultimate Instrument Combo Pack Free」を使用したりした。教師が iPad を保持し、選択しやすいように児童の肘を支えながら使用した。これまでは、絵カードを活用して本児が「はい」や「あむ」と発声したのに合わせて教師が代弁していたため、保護者から「本人の力で活動へ参加できることが増えたと実感できた。」とうれしい感想を聞くことができた。(図3)

- ・生活単元学習の単元「お祭り」の受付係で、挨拶や案内を担当した。初めは指で直接タッチ使用とすると、指先が丸まって爪が当たり iPad が反応しないことがあった。次に、タッチペンをしようすると、タッチの強弱によって反応しないことがあった。そこで、iPad タッチャーとジェリービーンスイッチを併用した。自分がスイッチを押すことで、相手に「伝わる」ことを実感でき、思いを伝えたいという意欲が高まり、お客さんが来たのに合わせてスイッチを押すことができるようになってきた。(図4)

図3：リコーダー演奏



図4：受付係



【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

①「伝える」→自分の意思が伝わることで、伝える喜びを実感できたのではないか

- ・自分の力で発信し、周りからも反応が返ってくるという経験を重ねることで、伝える喜びを実感し、「自分から伝える」という主体的な姿が見られるようになってきた。iPad を活用することで教師の指示や支援が少なくなり、本児の発信や主体性を引き出すことにつながった。
- ・自分の思いが伝わらないときに、これまでは泣いて不快を表現することが多かったが、やりたいことや行きたいことを伝えられることで気持ちが以前より安定し、自分から「伝えたい」という意欲につながってきている。

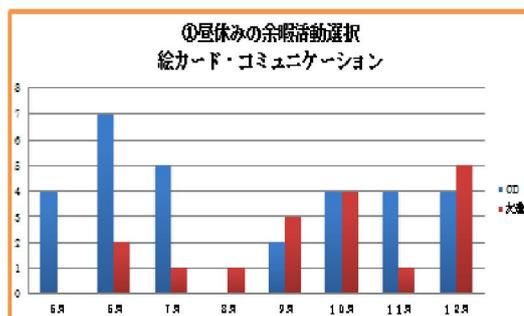
②緊張の緩和→手指の使い方を上手く調整できるようになってきたのではないか

- ・iPad を活用する際に指先の緊張を緩めて、画面にタッチすることが増えてきている。以前は、画面をタッチする際に思いを行動に表そうとすると緊張が強くなり、画面に爪が当たっていた。継続して iPad を使用したことで操作面の向上が図られ、指腹でタッチできるようになってきた。

○気づきに関するエビデンス

①昼休みの余暇活動選択（絵カード・コミュニケーション）

- ・1学期にはCDを選択することが多かったが、2学期から友達を選択することが増えてきた。興味の広がりが見られるようになってきている。



②生活単元学習～お祭りの受付係（Drop Talk HD）

- ・スイッチを押す（発信）→お客さんが券を出す（反応）の一連の流れが分かれると、お客さんが来たのに合わせてスイッチを押すことが増えてきた。「伝わる」ことが意欲や自信につながり、主体的な行動を引き出すことができた。

○その他のエピソード

①リハビリテーションでの活用

- ・秋田きらり支援学校に隣接されている秋田県立医療療育センターで、定期的リハビリテーションを行っていて、作業療法や理学療法の際にも iPad を使用している。具体的な活動として、次のような活動を行っている。

作業療法→上肢の動きを引き出すために、タッチペンを使用して平仮名のなぞり書きや都道府県パズルに取り組む。

理学療法→言語概念の形成を促すために、具体物を提示して色や形、大きさ等を示すシンボルの選択に取り組む。

②家庭での活用

- ・リハビリテーションでの取組を参考に、家庭でもお絵描きアプリケーション「ホワイトボード」を使用して色や形、大きさ等を示すシンボルを「Drop Talk HD」に追加し、家庭での学習に生かしている。（図5）

図5：家庭での自作シンボル



- ・学校で使用している時計アプリ「Feel Clock」を家庭でも利用している。これまで保護者の方は、見たいテレビ番組が始まるまで「もう少しだよ」や「後でね」と話していたため、後どれくらいかが見通しをもちづらく泣いたり、不快な表情をしたりすることが多かったが、iPad を活用して確認することで、落ち着いて待つことが増えてきている。iPad を活用するようになったことで、家族の支援の仕方や関わり方にも変化が見られるようになってきている。今後は、タイマーやスケジューラー等のアプリケーションを活用し、本児がより見通しをもちやすいような支援の仕方についても情報提供していきたい。